

第17回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「二人のおじいちゃん」

埼玉県立浦和第一女子高等学校二年 肥沼 由里子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

『一人のおじいちゃん』

埼玉県立浦和第一女子高等学校一年 肥沢 由里子

「んま、んま、んま、んま……」

赤ちゃんに戻つていくみたい。大介は咳ツバキきました。夜中にトイレへ行こうとしたら、おじいちゃんの声が聞こえてきたのです。——これじゃ朝アサ飯のときには眠っちゃうなあ。

「きょうは、あ、おつかれさまでしたー」

暗い部屋のベッドの上で、おじいちゃんは喋しゃべり続けています。誰もいない所に向かつて。

三年前、大介が七歳の頃、父方のおじいちゃんは大介の家で暮らし始めました。腰を痛め、一人で生活できなくなつたからです。それまで歩けていたおじいちゃんは、家に来たときにはまともに歩けませんでした。「これからよろしくね」おじいちゃんは言いました。

いつからだつたか、今となつては誰にも分かりません。寝たきりになつたおじいちゃんはぼけ始めました。おじいちゃんをおじいちゃんたらしめているものが抜けていきました。家族が名前を間違えられるともしさばです。前の家にいたおじいちゃんと今のおじいちゃんが同じ人だとは、正直大介には思えません。そのひどい変わり様を、大介は恐ろしく、また悲痛に思うのです。おもしろい昔話をしてくれた、楽しい遊びを教えてくれたおじいちゃんは、どこへ行つたのでしょうか。

おじいちゃんは認知症になつたのでした。

次の日は日曜日だったので、大介はおじいちゃんに朝アサ飯を食べさせることになりました。おじいちゃんは自分で食事をすることができないので、介助が必要なのです。食事のときだけは車椅子に座るので、その横に座つてご飯をあげます。





でも案の定、おじいちゃんは車椅子に座つたまま眠りだしました。スプーンに肉じゃがを乗せて口の前に差しだし、口を開けるように促しますが、開ける気配は全く感じられません。田はずつと閉じられています。そのままでは朝ご飯は一向に終わらないでしょう。

「洗濯物干し終わつたからもう代わるわよ」

困り果てていたといふに、お母さんがベランダから戻つてきていました。大介が椅子から立ち上がり、そこのお母さんが座ります。

「ご飯食べましょー」

お母さんが明るい声で呼びかけますが、おじいちゃんはお地蔵様みたいに動きません。

「全然口を開けてくれないんだよ」

そう大介が言つたとき、お父さんの声が飛んできました。

「なら寝かせてほつときやあいいんだよ」

いつもこれだ。大介は溜息ためいきをつきました。お父さんは、家族がおじいちゃんの介護に振り回されていると思つてゐるのです。確かに介護が始まつてから、家族で出かけることは少なくなりました。けれども大介は、お父さんが介護をさつやと終わらせようとするのが大嫌いです。

「そんな風に言つるのはやめて！」

お母さんが言い返し、あつという間に一人は喧嘩けんかを始めました。大介はうんざりして自分の部屋に戻りました。

立ち上る土の匂い。蝉時雨せみしへれが真夏の熱気を震わせています。田の前の朽くちかけた木の門を開ければ、細く続く庭があるはずだ。大介には分かりました。その一番奥に玄関があるのです。

門を開けると想像通りの庭がありました。小走りで玄関まで向かいます。ほおずきの鮮やかな 橙色だいだいいろが瞼の裏に残りました。

「こんこん」とドアをノックします。しばらくして、おじいちゃんがドアを開けました。

「はい、いらっしゃい。上がつて」

言われるままに家に入ると、懐かしい匂いがしました。畳の部屋の座布団に大介が座ると、おじいちゃんも隣に座ります。



「現実でのわしはすっかり抜けているだろ。こりにこるのは現実世界にこじるわしから抜けでた、普通のわしだ。昔のわしと同じだ。今日を入れて三回、夢の中で大介と会える」

大介の頭はこんがらかりました。何がどうなつてているのか考えようにも、蝉の声が部屋いっぱいに響いていて考えられません。

「まあ、小難しい」とは考えなくていいよ」

優しく言いながら、おじいちゃんはお茶を出してきました。それを飲んで少し休んだあと、おじいちゃんは大介に話しかけてきました。 「庭のほおずきを探りにいかないか? もろもろお盆だらう。仏壇に飾るんだよ」

おじいちゃんが指で示した先には、じちゃんまりとした仏壇がありました。二人は庭に出ました。きれいに色づいたほおずきの実は皺しわがついて、おじいちゃんの頬ほおみたいで。おじいちゃんは実が多めの華を、根元から鉢はさみで切つて言いました。

「これを横向きにして使うんだよ」

部屋に戻り、大介はおじいちゃんの教えてくれる通りにほおずきを飾りました。仏壇の前には茄子なすでできた牛や、柔らかい明かりに彩いろどられた盆提灯ぼんぢやんもあります。

飾り終わると大介は仏壇に拝みました。

「手伝ってくれてありがとう」

おじいちゃんはそう言いながら、大介に立派なほおずきの実を一つ手渡しました。

「お土産にこれ、持つていきな」

ふわりと手に載のつていてるそれは軽いけれども、大事な物のように思えました。潰つぶさないよう、そつと手で包み込みます。

「ありがとう」

大介が言ったのと同時に、部屋の時計の鐘が鳴りました。

「おや、もうお別れの時間みたいだね」

おじいちゃんはそう言い立ち上がりました。

「そつか……おじいちゃん、じゃあね」



賢治のまちから

高校生★童話大賞

おじいちゃんは手を振り見送ってくれました。不思議な振り方だ、と大介は思いました。ややなりの意味で振つてこの手が、まるでおいでおいでしてこのようなのです。

妙な夢でした。全くほけていないおじいちゃんと会うなんて。しかも夢に出てきた古びた家は、おじいちゃんがここに来る前に住んでいた家です。ベッドに入つたまま、大介はさらに夢の内容を思い出します。

あの細長い庭 踏んだ土の感触。部屋の匂いに 小さな仏壇。昔おじいちゃんの家に行つたときの記憶と、

手の振り方……確かにねじこちゃんはああいう不思議な手の振り方をしていました。□ではねじこちゃんとながら、手はねじでねじでをしていました。いつも別れ際には、閉まつてねじドアの隙間に見えるねじでねじでを見ていました。

「こい」とだと、ねむこ、モーすーうつ

隣かに声が聞こえます。やほりおじいちゃんにほけてしょゆうです。学校から帰り、大介はおじいちゃんの所に行きました。

たたいま

「はいおかれり。あめふつてた?」
声を掛けるとおしゃいたせんは喜

おしゃしたやんはなせかこの質問が好きです」「峰つてなかつたよ。」やあ、おやすみ

……返事がありません。まあよくあることだ、と僕はせず自分の部屋に向かねつとすると、ねじ二ちゃんは突然口を開きました。

僕は大介なんだけどなと少しがつかりしながら、もう一度おじいちゃんを見ます。

大介は息をのみました。

ねじこちゃんが、手を振つてこねます。昔のねじこちゃんなど、瓶の中のねじこちゃんなど、回し振り方で。



認知症を患い、おじいちゃんは別人になつたと大介は思つていました。姿と声だけ残されて、その他のものは全て失われたと。でも今、おじいちゃんのどりかにおじいちゃんらしさが残つてゐるようだと分かったのです。

おいでおいでをされながら、大介は部屋を出ました。

木の匂いがします。大介はまた、前のおじいちゃんの家に来ていました。木の門を開き、玄関まで行つてドアをノックすると、おじいちゃんが出迎えてくれました。

「はい、いらっしゃい。上がって」

最近こんな風におじいちゃんと会つた、そうだ夢の中で会つたんだと、大介は気づきました。そのときのおじいちゃんの言葉が蘇り、あれは嘘じやなかつたんだと思いました。

「今日で二回目だね、大介」

「うん。僕嬉しいよ、また元気なおじいちゃんに会えて」

おじいちゃんはすく寂しそうな顔をして、大介の頭を撫でました。優しく、慈しそむよ。

「今日は謝りうると思った」

おじいちゃんは何も悪い」としてないのにどうして、と大介は口に感いました。

二人は座布団に座りました。おじいちゃんはの前と同じようにお茶を出し、深く息を吸つて、吐いて、切り出しました。

「現実世界のわしが迷惑掛け、『めんな』

大介は何も言えませんでした。ただ俯きました。そつと頭を上げると、おじいちゃんはひどく悲しそうな顔をしていました。見ていたれなくて、大介はすぐに田を逸らしてしまいました。

「大介も、お前のお父さんもお母さんも、わしのせいで嫌な思いをしてるよな。わしに『飯を食べさせるのは大変だろうし、介護サービスにだつてお金が掛かるだろう。家族旅行にも行かなくなつてしまつたよ』だね」

どんな言葉を掛けたらいいのか、大介はずつと考えていました。でも上手い言葉は一つ見つかりません。自分の不甲斐なさに、大介はシャツの裾をぎゅっと握り締めました。



「年寄りのわしが、若いお前たちの人生を邪魔するなんて、おかしい話だろう」

「それは違うよ、おじいちゃん」

大介は自分でも驚きました。口が勝手に動いていたのです。もちろん、の後に続ける言葉なんて考えていませんでしたから、また黙り込んでしまいました。そして俯きます。顔がかあつと熱くなつていくのが分かります。

突然、背中に何かが触れるのを感じました。お日様の光みたにあつたかくて、そこにすると安心できるもの。

それはおじいちゃんの手でした。おじいちゃんが背中にそっと手を置いたのです。

「優しいねえ大介は。優しそうね、ぐるぐるだ」

大介はびくりと肩を震わせました。

「……優しくなんかないよ。おじいちゃんに何もしてあげられてないもの……」

「めん」

大介の声は掠れています。大介はぐるぐるしてもおじいちゃんの方を見ることができません。分かるのは、おじいちゃんの手のあつたかさと安心感だけです。その手の指先に少しがが入つたとき、おじいちゃんが口を開きました。

「大介にも、お父さんにもお母さんにもたべやん苦労を掛けて、悪い奴だよ、わしは」

「お父さん……」

お父さんがおじいちゃんの介護を嫌がるのを、大介は思い出しました。顔を上げ、思い切って尋ねました。

「ねえ、おじいちゃん。お父さんのことぐるぐる思つてね。お父さん、すぐねじいちゃんの世話を終わらせようとするから」

おじいちゃんは息を一つ吐き、答えました。

「お父さんがああなるのも、仕方ないんだよ。あまりお父さんを責めないでやってくれ」

大介は意外に感じました。自分のことを邪魔に扱う人を庇うなんて。



「現実世界のわしなんて、悪い奴の癖にお気楽だよ。何にも分からぬいまま人の世話になつて、毎日が過ぎて……差し迫る死の恐怖すら感じないんだから」

大介は、自分の気持ちを言葉にして伝えなくてはいけないと思いました。「おじいちゃんは悪い奴でもお気楽な奴でもない。僕にとつてのおじいちゃんは、いろんな遊びを教えてくれたおじいちゃんだよ。認知症になつてからも、おもしろいことを言って僕を笑わせてくれたよね。いつだつておじいちゃんは優しかった」

おじいちゃんは大介の背中をゆっくりとさすつて囁きました。

「……本当に大介は優しいなあ」

おじいちゃんの田尻にじわりと涙が滲んだ」と、大介は気つきませんでした。

その涙が夕日の赤に染まつたとき、時計の鐘が鳴りました。

「さあ、今日はもう帰る時間だ」

「もう？」

大介は後ろ髪を引かれる思いで玄関に向かいました。

靴を履いて振り返ると、おじいちゃんはおいでおいでをするように手を振つています。

「またね、おじいちゃん」

大介も手を振つておじいちゃんと別れます。

外は夕暮れ時でした。家々も電柱も烟も、赤色の大洪水に飲み込まれていました。

まだ、燃えるよつた赤が田に沁みてるようだ。大介は感じました。夢でのおじいちゃんの言葉を思い出します。

大介は、まさかおじいちゃんが謝つてくるとは思いませんでした。大介には、夢の中のおじいちゃんも現実世界のおじいちゃんも、肩身が狭そうに感じられます。いたたまれない気持ちになりました。

「大介、起きたならちよつと手伝つて

お母さんに呼ばれ、そちらに行きました。

「朝の薬をあげてほしいんだけど」



そう頼まれ、大介は車椅子に移っていたおじいちゃんに薬を飲ませました。薬を飲み終えたときです。ずっと黙っていたおじいちゃんが喋りだしました。

「もううちへかえりたいよ。なみこがしんぱいしてる。なみこに、あいたいんだよお」

ナミコ。大介とお母さんはどきりとして顔を見合せました。ナミコといふのは、大介が生まれる前に死んでしまった大介のおばあちゃん、つまりおじいちゃんの奥さんです。

大介もお母さんも戸惑つてしましました。本当のことを言つべきなのが、適當な」とを言って誤魔化してしまつべきなのか――。

一度田と二度田のときと同じで、土の匂いがします。田の前には朽ちかけた木の門。これで最後だ、と大介は思いました。

玄関のドアをノックすると、おじいちゃんが出迎えてくれました。

「はい、いらっしゃい。今日で最後だね」

おじいちゃんは、少し笑いました。

おじいちゃんと一緒に大介が部屋に入ると、一人のおばあさんが座っていました。大介の知らないおばあさんです。でも何故か、大介にはおばあさんが赤の他人とは思えません。

「この人、誰だか分かるかい？」

おじいちゃんが大介に聞きます。

「分からぬい……でも、前にどつかで会った気がする」

そう答えると、おじいちゃんはにっこりと笑いました。

「この人はね、大介のおばあちゃんだよ」

「おばあちゃん……」

大介は、おばあちゃんと教えられた人をまじまじと見つめました。不思議な感じがするとともに、胸が高鳴りました。

「ここにちは大介君。会えて嬉しいわ。あなたが生まれてくるの、楽しみにしてたのよ」

おばあちゃんは大介に話しかけ微笑みます。

「ここにちは、僕のおばあちゃん」



大介がおばあちゃんの前に座ったといふでおじいちゃんは喋りだしました。

昔を懐かしむような遠い話をしています。

「おばあちゃんが入院したとき、大介のお母さんがお見舞いに来ててくれたんだ。そのとき、お母さんのお腹には新しい命が宿っていた」

大介ははつとしました。

「それって……」

「そう、大介、あなたよ」

おばあちゃんは答え、続けます。

「『男の子? 女の子?』って尋ねたら、お母さんはね、『男の子です。大介つて名前にするんです』って言ったの。私、あなたの命が誕生してすぐ嬉しかった。それで私ね、お母さんの大きなお腹をさすりながら、『大介君、あなたが生まれてくるのを皆楽しみにしてるわよ。元気に生まれて幸せに育つてね』って言つたわ。あなたが力強く動くのを手のひらに感じて、ああ命が確かにここにある、そう思った。あなたが生まれる前に私は死んでしまつたけれど、今こうして会えて本当によかったです」

大介は自分の身体の片隅に、おばあちゃんに撫でられた柔らかな記憶があると感じました。あたたかさに満たされていた頃の、大切な記憶。

「ありがとうございました。いろいろ話してくれて」

大介がそう言つたとき、時計の鐘はさよならの時間を告げました。

「……お別れの時間だね」

おじいちゃんは低い声で言いました。大介は無言でうぐりと頷きます。

おじいちゃんは大介の手を取りました。

「大介とかけがえのない時間を過ごさせて、よかったです。大介、立派な人になれよ」

おじいちゃんの手には力がこもっていました。おばあちゃんは大介を抱きしめました。

「会えてよかったです。幸せになつてね」

その声は優しく大介に響きました。

「僕もおじいちゃんとおばあちゃんに会えてよかったです。ありがとうございました。ばいばい」



大介は涙を堪え、やつとのことでそれを伝えました。庭に出て振り返ると、ドアの隙間から手を振る一人が見えました。一人とも笑顔でおひでをしています。

最後の時間を、夕焼けは美しく染めあげていました。

もうあのおじいちゃんとおばあちゃんに会うことはないんだ。大介は考えていました。

「大介、私が洗い物してる間、おじいちゃんに朝ご飯食べさせてくれない？」お母さんからお願いされ、大介はおじいちゃんの所へ向かいました。大介が玉子焼きを食べさせると、おじいちゃんは顔をほころばせて、

「おいしいよ、ありがとう」

と言いました。大介も笑顔になります。夢を見る前よりおじいちゃんの気持ちに寄り添えるようになつたと、大介は感じていました。

おじいちゃんは確かにぼけたけれど、幸せを感じることはできる。だからおじいちゃんの笑顔を増やそうと、大介は決心しました。

おじいちゃんとおばあちゃんは、大介が帰った後に夜の公園へ行きました。ベンチに並んで座りました。おばあちゃんがおじいちゃんの肩に頭を預けて囁きます。

「覚えてる？ 私達」で出会ったのよね」

「もちろん覚えてるわ。もうずっと前のことなのに、昨日のことのように思い出せるよ。あの日も今日みたいに星がきれいだった」

一人の上には満天の星空がありました。

二人は、静かに、ゆっくり、歩んできた人生を振り返りました。子どもが生まれたときのこと、家族で出かけたときのこと――。

不意に一筋の光が、夜空を駆け抜けっていました。流れ星です。一人が顔を上げると、また一つ美しい流れ星が飛んでいました。

二人は願いました。大切な男の子のために。